

桑田日記

中

✕
a 12

914.5

Aw
2

No. 1185

18
212



富士川文庫

3612

栗田日記

畑維龍識

昔ふ好まぬものありて虚誕妖妄を傳りて人成
たれりては事なき事なきとて予一説有りき
作者のころふかくいふうて人を生かさん
をひきまわくふもいふ事寡聞浅陋小識
くまらぬりたれりた家ありたのまらぬ小識
ふらふら後の人とていふ事いふ事いふ事
人とていふ事いふ事いふ事いふ事



有人大切書記より孔軍物より等より
馬と加ふるし書にあらしと云ふ事好書の
之の廣他よりと實際のやうに云傳ふを
りし言終

小西好古より引くと云ふ事
源流一本ありと好古予に告めしと讀史せよと
云ふ何んやと讀史より引くと云ふ事
好古云吳邦の書籍よむにたたりたりと蔵書
始と云ふと書の古又よむと云ふ事

毎古の詩よりて抄る古日記と云ふ事
語をば冊吹ぬきと巻数多きことやぬ
あつと云ふ事
月す

書籍乃表紙かうと筆と用ゆる板實に横小
冊ありと記録表紙と云ふ月ふと外と外と
と云ふ事
大月とて史文と云ふ女宿の名と云ふ吳邦の
書衣ふりしと云ふ事

彼岸乃中只農夫の種たりしすの日たり 薩
葡萄なり、尚日より前より、時、肥すことなるれ、
虚耗すこと、性、新、唐、家、り、彼岸の字、佛、書、より
出、る、こと、一、階、り、外、の、み、字、と、し、る、り、有、り、大、小
農、り、を、得、り、也、故、尤、の、お、く、う、と、を、ひ、く、ま、風
俗、あり、月、あり、き、耳、不、熱、し、る、り、の、俄、ふ
あ、い、も、し、る、す、と、る、り、し、る、り、と
儒者、素、火、り、皖、き、る、書、籍、の、名、を、考、へ、ひ、和
學者、の、意、に、乃、回、録、に、爲、有、と、り、る、古、記、と、述

愠、り、の、志、ある、もの、考、え、あ、き、と、既、往、と、不、往、の
意、を、あ、き、は、是、を、考、へ、ひ、行、む、益、を、し、る、り、
好、古、の、大、より、先、を、行、し、と、回、録、の、幾、と、し、ぬ、り、と
い、い、お、お、の、り、教、あり、て、地、の、有、り、人、た、
利益、に、目、を、書、ち、る、り、茶、を、を、記、し、も、今、
赫、耀、
より、本、邦、より、も、一、回、史、延、喜、式、江、家、決、方、令、義、解
拾、芥、抄、より、の、應、仁、の、回、録、を、ま、ぬ、り、と、
裁、路、の、要、ふ、く、ぬ、り、う、つ、む、お、そ、い、後、人、の、り、
あ、い、も、し、る、す、と、る、り、死、を、考、へ、ひ、先、より、も、多、り、

を付いとのめく音よに衣着たうう精ひあまるじ
たふきれい呼吸忽として死するところころ
うしきふちり酒飲たるもの破のまむの時きり
うり死するところありかゝ風音をほを飲る
飲ぬるおとるよ
詭詭乃鈴いむり一筆ある時をいよのよし
その音々のし一浪波の玉送とちあらししと思
小字置一きの式将士の家とくんとくしり
今も都人の旅よあつた悪魔路を鈴とる子

小つちくふり古の送製たるし
京河建仁も、右大野頼朝の建立より梶り
京河殿命を信くしつちり寺の四の垣な
ともせしとちり今の垣いよとれ梶京と送
割衣ちり好るものもの建仁も垣とちのちと
い梶京とちり
人の居宅ふちりて泉水のわしとちり
予知時、河波の徳しゆ小位、古史の時、京都小
おちり廿葉とちりの水、浪舞母お守り水

悪き地たるにはすまぬものあり候へども、
より東を論じても、
梅聖俞、竹、買山、須泉、種樹、種竹、
かゝるゆゑ、竹、種、竹、種、竹、
我國の人、眼、
蛇の形の、
の、
な、

なり、
を、
中、
美人、
種、
久、
潤、
あ、
そ、

享保年中のころあやむらん京師を板の西
麻の果とありしころ其下ふ戸名の二やとあり
あつと申すもありたりといふころあひ
そのひ特識の字つらゝ漁井殿の監定を請ふ
公と先にお室河原の麻とありきたる家の看板あり
との字ふらやとて戸主も名字ふらとて用也
着うたたりおろしとあるとのこは遠くはあつ
あつしと傍の有りし浪蕪を女とて迷ひて
身をあやむらん人と旅をふら公のいすゝ免に

かりて獄をくつりしと申すしとるうらし
人のくつりしと申すいたうあつとてあひしと後
差ふらの僧ありとてその獄をはなすも一脱
くまことをおろしといふしとくちのぬらふ
いふしとてあひぬらふ数月経くわさといふ人の
うらしとてあつとてあつとてあつとてあつと
すむしとてあつとてあつとてあつとてあつと
きたつとつりしとてあつとてあつとてあつと
あつと人ぬらふとてあつとてあつとてあつと

不学なる史官の著ふ後醍醐帝の御紀をかくる
は既佳きと好むる武田信序も子信云に諫反
ちしと書くる史策なりかきしむるいふ事し
伴尾の三日絶糧記ひ一戦國の時めりし
こころありしと後の居士の書も多くある
家國今の太平世界もに思ふ先生三言海蓋と
ふい祖来先生上総とて極実とふ言ふらひ
しるかる艱苦とて先学の業と勸しより名
流の公女の鳴鶴とらりぬ大父丈の臣乃為りし

窮する世乃治乱なりつる事なりす富貴の家
も生きて生涯の艱苦を知りし人ともかきし
く次後にも生人解する事の稀なりし
平泉君の傳り物有可忘有る志ははたき
て人の心はなる妙徳なりねえ祖えのもの人
かきしる金抄も子孫のものやちふ信佳し我
用とて人の鄙吝ある志なりしは志はたき
まはる然の耐人のめりしはたきしるこれの志
貴日ちりては完美といふ志者かきしむ

爲さるゝ家の晝衰死の多矣福に時のつり
かりとく積善の家をくぬりいそつ天福永
はえ孝子慈孫の由をきんし者んや
端午競舟とくむく淳古り一隅とくや
く小舟ふましく彼岸の思ひも八瀨の競舟
とく端午ふたしく船とくそふとけり細合
平島舟端午ふりうとくをえとくと語り也長
流もかりとくゆかりとく安
豊后ふの時綱囊とくふものはくそ多氏小福膚

の紙をを巻くふちうとくをむろとくあつ活牙
乃たうとくたうとくも今世市問ふ唐紙をむひ
紙事とくとく祖も福海のかうぬ淳古り拾
宗僧とくふものけり好中紙との集り一矣傳
とやとくあつとくさうとく又とくちり紙をむろじ
て供やうすうとく有り吾邦の巻紙ひろひも
お似とくり
うやの大木とくりたつ士當帰よあつすうとの
大木とくりたつ樹の朽とく敷のつまきとく紙

いふやうにふらふらひいふやうにふらふらひいふやうにふらふらひ
筆の字ありてその大木と云ふやうに

澹州翁の冥西乃を孺やう壬子年東のふま
て敬慮のわたりに信の榮伯連水宗進對西せん
と吊ぬえふ異日宗進予の定ふ来りては書
牘をてんて翁を拓く志あり有りて来りて西前
り一東破中といふこと此より翁の衣を若く小
襪如きをともち翁の髪やうく多きも翁乃
こゝに飄忽としてては宗進し如家

人とおひきつりてむ半糾許清話しては
ぬそ後宗進予の譲りては翁のやうに
時節のよむと俄に一庵のたてふや海やうく
おひきつりては翁のやうに教奇の心の底まで
榮事ふらうらるるものなり
三宅嘯山翁和漢の学ふりては他借歌ふが
そのりて美濃の文考とては翁のありては
句りて午ふちの念とては朝寐夕涼ののを備
てしと人の世とてはやんあふのながり

嘯止ま支考らるるののこを記したる小書ありしは
一予が加賀のふたむらふ小澤の物籠とて
まゝの水とふ考りたるを嘯止とていふに
るのの考りたるのふつと考りたるつと考りたる
鬼貫の冷水のすゝふとて其の考のふに
ふ嘯止の飛詣道ふの川と考りたるふと
人も氣象さるる名利さるるらるる事考り
て嘯止の名ふ考りたるふと
ふ度伯陽さるる考りたる考の学ふらると田の兵

決通一考も本門の一人なり。嘯止
とてふらるる國とてを七句の歌より古今集
毎の子遍讀の課をまゝとて考りたる國と
ありし胡々吳周のことと年ふ波眼ありし人
の本朝の考りたる考りたるとて考りたる
考りたる考りたる考りたる考りたる考りたる
考りたる考りたる考りたる考りたる考りたる
考りたる考りたる考りたる考りたる考りたる
考りたる考りたる考りたる考りたる考りたる
考りたる考りたる考りたる考りたる考りたる

道の冥かやうも海にまかりし字の陣にまかりし
報恩謝徳の志をつつと持し一信時には理法
知る者いふも一たも一信にまかりしはあひさる
まかりし問すまかりし水くもまかりし海に
沙塵にまかりし花とのかうはくも先物を
まかりし一切の書とまかりしまかりし人者
裁くはまかりしまかりし路にまかりしまかりし
己の志とまかりしまかりしまかりし地者を
まかりしまかりしまかりし人の志とまかりし

んや後世の志とまかりし導く人なりそまかりし
はくも古賢の志宗し行ありなり
まかりしまかりし和并の徳に中和の和くまかりし
まかりしまかりし中和の志と子思の中庸に中者天下
の大なりし和の天下の道なりし致中して地位の
物育まかりし和の志とまかりし神とまかりし人心と
まかりしまかりし世とまかりしまかりしまかりし
まかりしまかりしまかりしまかりし鬼神をうんせし
んか

そと中つせりれ、源信之波よりわがしは五音者
又之三者徳理をま

奇連願ぬ、言ひのそとふ人のあはちとちたなはし
とよこたつてもちたはそと頼政も忠度しうこち
よまうれともあはれの人こちつちたつちたつちたの
おとらふ財ぬ、言ひのそとふ人のあはちとちたなはし
三吉の三好とくくぬ、阿州に三好郡ありけぬ
小笠原源氏とて信濃ふより、河波も福りけぬ
と教代 細川管領の家より、先達つたはた

有り三好、細川の下屋敷あり、細川管領乃家と
権ふおとせり、一旦之を隷属とつたらちあり
維毫、河波乃旧家、元末氏ありとと、三好氏のそ
族ま出とふ久し、田男あり、あまの系傳は、そり
し、家つたつと、ふれ小口あり、長一人あり
朝、た、三好とつら、く、朋金二公ありてま、
環とけ、草柄とく、月貫、鶴養、之、孫、の、副
形、の、常、有、り、て、ち、つ、と、ま、あ、り、一、刀、を、持、て、維、毫
の、知、り、し、と、そ、つ、ら、ひ、と、の、と、ら、う、ぬ、そ、後、京、め、ま

うつらおのゝ好業として入道と業とをもちの田舎
よりあつたよもいふ予のあはとたつていふにぬ
舊氏のおつらおの足下、三好氏の何となく出
たつたつらおのれをうれよの、ききと云は、あつら
て三好のうれよをうり天性すさぬうのあつら酒
桃赤飯のうらと昔のよのむゆの三好の名はう
とらうのうらうのうらうのうらうのうらうのうら
とあやまらうのうらうのうらうのうらうのうら
本阿弥光悦の竹村記といふ書と人うらうのうら

く、光悦の舞一としてそのあつらおのうらうのうらうのうら
山子紹もあつらうのうらうのうらうのうらうのうら
あつらうのうらうのうらうのうらうのうらうのうら
さうとふく、用ひいへるもあつらうのうらうのうら
ぬけそ外口剣の監定茶屋、宗端とあつら
あつらうのうらうのうらうのうらうのうらうのうら
そのうらうのうらうのうらうのうらうのうらうのうら
人あつらうのうらうのうらうのうらうのうらうのうら
常はあつらうのうらうのうらうのうらうのうらうのうら

城をとり入るは雲東より敵命ありて光
 悦の地を治るは新小光悦家治りてはまの
 盗賊を治るのうききうしはまの民を治
 たり知るくは光悦の民人治るくはまの
 母好秀といふ居の教育の民を治るくは
 一切の郡を治るくはまの民を治るくは
 師たり孝悌忠信の民を治るくはまの
 まてもくはまの民を治るくはまの民を
 治るくはまの民を治るくはまの民を

探るくはまの民を治るくはまの民を
 三浦子兼の蘇我人よりて平國よりて一買人
 毎年長治くはまの民を治るくはまの民を
 の道とて治るくはまの民を治るくはまの
 ほの民を治るくはまの民を治るくはまの
 子治るくはまの民を治るくはまの民を
 たり治るくはまの民を治るくはまの民を
 には治るくはまの民を治るくはまの民を
 ありて治るくはまの民を治るくはまの民を

と云ふ一節命を奪ひて茶の湯と云ふことしつゝいふ
人の著述とあるんじふり
名山踏察記を以て洞窟中へ入ることをなす
わざと云ふ記あり橋本氏もやとて浪巻の漢田
系といふ医師の倭後の或深山の洞窟中へ入りし
記とあるものありし家にも記あり由風もあ
れり予一人のいふと山中の洞窟より身中
へいりやゆきことあり父母の遺徳と請ひたり
かきとくありし中一ふたありし岩をすまはれしに

うらまんとてうりうりし松明途中そと王(た)は
茶後ふまふふ毒蛇蟹乃まがし好ま人の
あつし一人のむねぬふありてんし事し
おぼすも信するもの十二三ありし
むらうし岩中に異物たりし誰かをかき取り
てまうし香火ともいふやあも少年の若
氣も人かゝる魁魁魁の位なりし一宿
やまのちりきりやあも百年の壽命をた
しめしし誠天の冥船と云ふ魚も今より

以後の生涯の原動力を成すものなりとの同志
 の人々も心づくべきなりと云ふ
 むし宗教の義佛を讃揚と指くも時地を
 権石とわくも仏印を食應と指くも今世業の
 席を供と指くもそのかたもむしと権石といふ
 会席の文字と用ひしむるも権石の文字を
 へしや東坡文集の用ひ
 却て信々来りしりやの著者の筑唐とすゆ伊
 蒲の餐意ありしありありは様番書字と

係して筑唐と書くは筑唐といふこと
 せんく教もよりのことなる余の書か
 かりの心とゆひしことなることなる
 を筑唐といふことなることなることなる
 して係してはゆひぬわし我本國の心
 人の死んたる時其の心も皆と母と
 夫をわひしりや其の心も皆と母と
 夫をわひしりや其の心も皆と母と
 夫をわひしりや其の心も皆と母と
 夫をわひしりや其の心も皆と母と

西氏
 家記

探幽の名を冠した画工の史にあらざりて唐土の人の探幽の
画と名をとりたるもの多きを著しよりの幽と幽岡の幽と
又さしおりの家園と名を著しよりの幽と幽岡の幽と
とも幽と名をとりたる和人のよりの唐土の熟した
をさしおるをさしよるる画と名を著しよるる

享保年間より徳藏の史えりの高僧証夷府の近
りの嚴命と名を著し蘭の画と名を著しよるる
ことと名を著しよるる傍即言ふは南の平病に托
しよるる一書と名を著しよるる曰又と名を著しよるる
拓堯の名を著しよるる

由らりと名を著しよるる本を著しよるるいふことと名を著しよるるす何の書

よ出らるやいふことと名を著しよるる飯田氏

おもしろく名を著しよるる名を著しよるるいふことと名を著しよるる
下ふ名を著しよるるの眼を著しよるるはさしよるる将くと何れの名を著しよるる
名を著しよるる眼を著しよるる平人の名を著しよるるいふことと名を著しよるる
名を著しよるる槐記と名を著しよるるいふことと名を著しよるる道生八筆と名を著しよるる
いふことと名を著しよるるいふことと名を著しよるる

唐六典といふ書乃雷ののまうに禁電といふの
いふことと名を著しよるるいふことと名を著しよるる知らるる作を著しよるる曰雷の

き雷公の洞より紫電と紫とく電乃形を創製し
るるとのなるし本邦を紫なりつるしく作
らるるなるなり

今川貞世の息仲秋にありたる今川庭訓も
その由と今川状とるるしい傳へ玄惠の庭訓性
其よりふとの父子の教訓あつりしる事をもし
たきいふ庭訓とるる後世の村字宛乃傳字のあや
まらより出くるなりし

和歌のみ所村に良品乃掃をいふに今清所村を

清所掃とつやあるま次の所とまの公乃掃とよふ
あやありより出くる名なり後世を清所とよふ也
つなまりたるやうにふなるともまの人の名出所
後に清所とるるまの皆所なりし

秦始皇を奉じよ清孝のひ暴雨とよけく松樹下に
ありしやまの孫ふまより松五支の官とゆるし
り五支まの秦宮第九等の爵ありまを松樹
み株のやうにわしとるる品字宗氏中に陣継
儒より

浪華として西の国より米穀を積むる船を待つ米
穀の價とさう下はさきほどの常より高きとほや米の
日和の陰晴さうのふ浪路の周りに日和を能くしる
光景のまををなすひまうて是を能くしる陰晴
とさうしる老婦云く光寺のつくふさうさうのふ
かさうしるそれの浪路にさうとつくは事さうの
く千光寺のの領ふかさうしる雲をえん陰晴
と風の音をさうしる智恵とさうしると云は事さ
多人の音をさうしる復とつく浪路の古今

和漢乃用於損益と云ふぬは漢にさうしる日本
地理風俗時勢と云ふぬ吳邦の人の終樂制度
さうしるは周の今の事さうしるは光景の日和
みるよりいかにさうしる受のこの國も後の世の周の割
とさうしる用いんとして人情とさうしる米の言
とさうしるさうしるたるやさうしる宋の王あるさうしる
お後車のいさうしるさうしる

諸産の國の経刻とさうしるさうしる儒教によいさうしる
さうしる儒者のまをさうしるさうしるさうしる
さうしる儒者のまをさうしるさうしるさうしる

とせむらゐりぬのまよは准たるや和厚とて
古式をたゆしいうる相まのちあふふや

せよ似せる事のみよとのこわらの名なる契沖の
岡梨尾流の産をく知時小念百ををけいんくよみ
夫よりしてあまの言籍よりいりぬいふ予
知りし耐田舎よりく小く百と姉の村や
ふふ業のひこをく讀くあまのうらまの意り
むふえふいふはらぬ今まふ小く百とあつ
に解りぬいふとたと知ふあふ和奇

あまの復するもあふ古賢のなまひ性たて
のたふいりるこやあふ

綾小路東洞院東入新神所の社より源三位頼政
の等宅の徳子ちうとふか或は申のとりの四塚
以前よりふ六角舟に頼政の舊宅ありしや
知りぬ室所殿花の湯足いりまきの所ちりや
ささくた知りぬのちう花の湯所は後新町より

に有夷虎の八幡の祠、尊氏お軍の徳子あり
七月十一日、東山の火、室所殿の時始り

て三百余年ふりぬのむかしはの毎年たもつ
れ〜〜〜の集に〜〜〜か〜〜〜は
庵主て竺のまもみぬ〜〜〜奇観と
いぬ〜〜〜
寛政癸丑去六如上人浦乾も毫満山〜
て岩倉ふあ〜〜〜花えよ〜
藤原公羅發の地なりといふを〜祖弟を禪の
あ〜〜碑なり上人と〜〜
後唐の天馬の碑と〜〜と奮傲と冠と

拭うり〜事〜固史〜載〜世〜
公は東一の太信〜〜〜福ぬの文と續〜
世の任職と〜〜この福海博物の字〜
から太信の人と〜〜姑丈の石とぬ〜
〜〜の碑と〜〜公寛寛成
予弱冠の年〜〜東山張園を〜
た〜〜か〜家名山の境ふ〜海内の名を
〜〜のた〜〜

其の... 口ふ... 三十年を...
 今この... 天... 年...
 書画の展覧あり... 三態...
 今會ふ... 此の...
 ... 紹介...
 ... 名刺...
 ... 一...
 其人

赤松滄海 龍草 皆川 六如上人
 維那 和田壽山 伴 鈴木
 龍之 佐木長秀 永田親 中
 香山 是日 香山氏に 永田氏の
 ... 外...
 ... 鬼
 ... 又 文
 ... 乃

つひに骨の予とすを強ひ加護とられんか
いんくく病一汗とす

大内裏の時井園とんふむり
今ふその方なるもの神泉苑とす
神泉苑池まろりれむの神泉苑
八中く代天子神泉の池なる今
鏡池一池なる二十回をい
くまふやまより後には
世ふ多くは人の喜考とす

浪花の下ち所とる所の有寺と入
秋乃今なり一
藤山むの人の
人
今
と
の
予
を

希代乃改書を以てむらむらむらと人系以て
するにむらむらふむらむらと今ハ清胡もむらむらの我
國よりむらむらむら我むのむらむらとむらむら
白王侃の海詔を疏の足利の學校より出せる古文
孝經の家におむらむら清胡と後り知者是者 書
ふのむらむらむらのむらむらとむらむらとむらむら
と外吳邦よりむらむらむらむらとむらむらと
蒙求むむらむらむらむらとむらむら又法隆寺の左
傳釈のむらむらむらむらとむらむらむらむらとむらむら

むらむらむらむらむらむらとむらむらむらむら
はむらむらむらむらむらむらとむらむらむらむら
にむらむらむらむらむらむらとむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむらとむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむらとむらむらむらむら
仲村揚の家國に傳りし樂と一ふ耳ふむらむら
隋老の宴樂とむらむらと判りしむらむらとむらむら
寶唐唐年ふむらむらの象唇鉅麻とむらむらの象
師ふむらむらとむらむらの象とむらむらとむらむら鉅麻

氏先祖と明礼と遊ぐ樂器とよくありぬしと漢
 とくふものも文字傳りて正しくまこと善きことなり
 身亦明後と着して是とありて一々之を後鉅麻氏治
 小く心疾とくせしむる身亦のりぬ是を予もまじく
 又其のをるるものなり今も其門人ありて今より昇平
 の一塵のりとも無く世に明樂とありとも鉅麻氏治
 之を魏氏樂とありて魏の性なり心疾得ぬ伝くま
 樂は亦消滅のまじくひてこそ唱あつたことなりたれども
 世にまじく人稀なりは前よ浦上王素といふもの

ことと傳るものこそ是れ魏準幸く樂よりは人
 なるはたし本物なはたりし樂もことさき為ふある
 之れ吹樂のたれを若くはふの彼市なども明物割
 しを古雅いふ人ことさきし中家もはつてあらせり
 是のり中より坊種のすだのりなり古物ありて
 一年予浪華とて讚列丸龜のたれえ亦まは慶とあり
 老匠より西合しぬものこと京漢の学ふからし
 予ふかしてつるえ亦氏におきし一々三好氏たり
 級ともその好の紋ともまはるなりと伝ひぬる家も

即ちかくし〜物々ありせん〜一むの病を病と
死すありぬそ其妻なるもの物々あり〜といふあり
しゆりぬ人々よ遺恨ももあぬゆき元末氏ハ一
改りもつと〜外に掃りぬ氏より〜海郡郡
宗喰浦と〜元末系の城墟を〜藤原氏に
〜長夜焼く〜一ぬ思先考小〜ありあきて
松尾氏と改む〜支族の〜皆元末と氏と維
龍ハ系よありて畑氏と思〜系や青山氏と思
家兄おおく死す〜りて〜れハ家や知見と〜

元末氏とつ〜む家記〜一記徴ふ〜と仰その
流さるを考〜なるの〜今なり〜覺〜その祖之
の来由を考〜し〜りぬ

